

汲古一心

『席上揮毫』(二)

坂正臣、柳田泰麓、岡山高蔭などという先生方に伍して豊道春海、安本春湖、花房雲山先生などとともに私どもの恩師霞洞(武田霞洞)先生も黙々と書いておられたのが眼に残っている。墨が足りなくなると、誰彼なしにそこいらに貯っているわれわれ弟子どもは、どの先生の墨でも磨らされ、しまいに先生方一同の合作などを一幅お礼に、頂戴に及んだりすることもあった。

実はその合作がほしくて墨磨りを巧みに買って出たことも、なかったわけではない——苦しい弁解ですな。

それが泰東(泰東書道院)でも、のちに出来た謙慎(謙慎書道会)などでも初めのうちは、みな席上揮毫をやっていたのである。

だからその以前にやった明治書道展などでは、もちろんこの席上揮毫があったのだが、ここでは霞洞、春海、華畦(諸井華畦)、春湖などという諸先生はあまりおやりにならない。つまりその下請けをわれわれのような二十代のものでやらされたのである。

生まれて初めて人前で字を書くのだから、急性心臓病みたいになって、柳田先生の真似だなどと称して震えをごまかしたり、知らない字の崩しをソツと調べたり、人様に申し上げられない苦しみと

して、袴の腰板まで濡れるような有様で、頑張って恰好だけ一人前、字は十分の一人前みたいなことをやり、碧潭(江川碧潭)、鶴洞(鳥海鶴洞)、祖洞(林祖洞)、慶雲(金子慶雲)、旭洞などという大先輩の尻について、汗と筆を一所に揮ったりした。

今、正月を迎えたいと思いつくのが、この席上揮毫は当時の各社中の新年書道会でも必ず重要な催しものになっていて、相互に各社中の会を廻りあって応援揮毫をやり、小豆粥ごろまでは必ず毎日のようにこれがある、ついで一酌の方も出る、紋つき袴の先生をおぶってお宅へ届け、背中の先生からオシッコをかけられ羽織袴を洗濯に出したなどという逸話もあった。

むかし、書道展などというものがない時分には、名ひろめと称して茶屋や貸し席に一席を設け数日にわたってこの席上揮毫をやった安く頒布し、世評を買うような催しの方々で行われ、これには相当の名家が応援出席してこの売名揮毫に箔をつけたものだ。柳田泰麓、貝原遜軒(益軒の孫とか)先生から聞かされた。

綜合書道展と個展が三百六十五日いつでもどこかに催されている今日、書道人口何百万と称する今日、こんな催しは全く跡をたつたようだが、それだけに往年のこの古い行事が懐しまれてならない。おっしゃるまでもない。こりゃ齢のせいでしょう。

〈『共励』昭和四十五年一月〉

『筆間雑記』中村素堂随筆集昭和六十三年刊より転載。

